

# 内村鑑三の「アメリカ」をめぐって

——コロンブス讃歌と『地人論』の信仰宣言（その1）——

杉山直人\*

On the “America” of Uchimura Kanzo :

Praise for Columbus and Faith Credo in *Earth and Man* (part 1)

Naoto SUGIYAMA

要旨：本稿は内村鑑三が語った「アメリカ像」再考を目的とする。アメリカをめぐってアンヴィバレントな発言を彼が繰り返したことは定説である。だが、自らの発言に明示される「アンヴィバレンス」を彼自身はどの程度意識し、どれくらい掘り下げて考えていたのだろうか。あんがい彼自身は矛盾したものと意識していなかったのではないか。外部から見れば背馳するアメリカ像のなかに、むしろキリスト教信仰に基づいた彼なりの調和を見つけることもできるのではないか、というのが本論の趣旨である。本論（その1）は内村の「コロンブス讃美」を扱い、次号では『地人論』を中心に論じた（その2）を掲載する。

## Abstract :

This essay aims at the reconsideration of the “America” of Uchimura Kanzo. Though it has been already accepted that his remarks concerning the States showed repeated instability and even ambivalence, there remains some room for discussions about such discrepancies. Close reading of Uchimura’s essays on Columbus published around 1892 and *Earth and Man* (1897) offers clues to understand that his evaluations of “America” are basically based upon his Christian faith itself. Though they often give the impression of sketchy expositions, they are at least harmonious according to his own standpoint. This first part deals his views on Columbus and the second part to be published in the next issue of this journal will deal with *Earth and Man*.

キーワード：内村鑑三、コロンブス、アメリカ、『地人論』

## アンヴィバレントなアメリカ観

内村鑑三と彼が語るアメリカ像をめぐっては、太田雄三氏の優れた研究がある。『内村鑑三ーその世界主義と日本主義をめぐってー』（研究社1977年 以下『内村鑑三』と略記）に収録され

た第2部第5章「内村鑑三の『内なるアメリカ』がそうである。『余は如何にして基督信徒となりし乎』、『日本及び日本人』（のちに『代表的日本人』）、『後世への最大遺物』、そしてこれらほどには人口に膾炙することがなく、どちらかといえば彼の著作のなかではマイナーな『流竄録』と

---

\*関西学院大学国際学部教授

いった作品を中核に据え、加えて書簡や日記などから渉獵して執筆された50ページにおよぶ力作である。

結論として太田氏が力説されるのは、1) アメリカとアメリカ人をめぐって、内村は肯定から否定へと「極端から極端へ揺れ動く評価」を下す傾向があり、2) その振幅のぶれはアメリカをめぐる客観的事実をとりあげて語るといよりも、日本人としての「内村自身の内面について〔より多くを〕我々に語って」おり(『内村鑑三』186)、3) 若い時期にはアメリカ文化やアメリカのキリスト教をバランスのとれた穏当な言葉を用いて評価することのできた内村ではあったが、晩年になるにしたがい「アメリカ国民性の実際的(宗教面について言えば現世的な)側面に対する批判」(『内村鑑三』196)は寛容性を欠いて激越となっていった、ということである。要するに太田氏は、内村のアメリカ論が全体として「アンビバレント」で中庸性を欠く不安定なものであることを主張されている。これは確かに内村のアメリカ観を考えようとする読者の多くが共感できる見方であろう。

本論では代表作『余は如何にして基督信徒となりし乎』(引用は岩波文庫版を用いて以下『余は如何にして』)を脱稿した時期(1893〔明治26〕年)に内村が語った「アメリカ」を改めてとりあげたい。彼のキリスト教信仰とからませながら、新大陸そのものを内村がどう理解し、意味づけようとしたのか、といった疑問も整理したいからである。そのために「コロムブス文学」、「コロムブスの行績」(以下「行績」)それに『記念論文 コロムブス功績』(以下『記念論文』)など、新大陸発見者を扱った論考をも対象としたい。

これらの多くは1892年から翌年にかけて『六合雑誌』に発表され、単行本として上梓されたものもある。1892年は言うまでもなくコロムブスの「アメリカ発見」(正確にはパハマ諸島「グアナハニー〈現サン・サルバートル〉島」に到着)四百周年にあたる。欧米では盛んに記念行事がおこなわれ、翌1893年には、その壮麗さで今に語り継がれるシカゴ・コロムブス万博も開催された。とうぜん出版物も多くを数えたようで、1892

(明治25)年秋頃には内村自身の言葉を借りると「兩三ヶ月中に欧米諸国の著名なる歴史家の手に依て成るコロムブス文学は実に数十百種に登るに至らん」(「コロムブス文学」全集1、310)という盛況ぶりだった。こうした欧米のコロムブス・ブームが刺激ともなったのであろう、『六合雑誌』明治25年9月号で内村は「此偉大探険者の性質並に業績に関する一二の論文を求めつゝあるなり」と新大陸発見者への関心の高さと、コロムブス論を自分もしたためたいとする意欲を語って記事を締めくくった。次号10月号になると全集第1巻収録版で15ページほどになる「コロムブスの行績」を発表、次に翌26年2月「友人渡辺秋造 高田増平両氏の助力に依て編纂せしコロムブス伝」に、内村自身の言葉にしたがえば自らが「鄭重なる訂正と数百万語を増加し」(全集2、77)、上記『記念論文 コロムブス功績』として単行本の形で上梓した。全集版では50ページほどである。

うへの記述で、自分ではなく高田増平氏が「コロムブス伝」を実際には執筆している、とする内村の言葉は疑義なしとしない。「コロムブス伝」を収録した『全集』第2巻に解題を付された鈴木俊郎氏によれば、内村が自ら「加筆した」と語る部分は、思想・文体ともに「内村鑑三の個性を反映するもの」(全集2、489)とされ、「本文自体もごくわずか書き直したもの。」という。この判断にしたがえば、雑誌に発表された初出「コロムブス行績」と『記念論文』とのあいだに大差はなく、あくまで内村本人が執筆の主体であった、と考えられる。なにやらいわくがありそうだが、必要だとわたしが判断したポイントをめぐっては初版本文と増補された『記念論文』との比較も含めながら、内村のコロムブス像を追ってみよう。

### 英雄コロムブスと新世界讃歌

「行績」冒頭、コロムブスを「近世」の扉を開いた英雄だと内村は絶賛する。中世的「宗教上の迷信、思想の束縛、封建時代」はコロムブスとともに死に、「合理的宗教、自由思想、立憲政治」が彼と共に誕生した、と歯切れがよい。(全集1、312)この箇所には15世紀末から18世紀に至る

世界史的な文化のながれが省略されており、説明不足気味である。詳しい解説は実はのちに姿を見せるが、ここで特徴的なことはコロンブスとアメリカ合衆国とが一体化されていることである。内村が言う三つのいずれをとっても、アメリカ合衆国が公式的に建国の理念として前面に押し出す理念であり価値観である。宗教改革、清教徒革命と名誉革命、アメリカ建国など、コロンブス死後三百年のあいだにヨーロッパと北米を中心として起こった世界史的なできごとを採りあげ、コロンブスと「アメリカ合衆国」との距離を、内村は最短に縮めている。両者は内村の意識と彼の描き出す世界の構図にあって表裏一体となっている。

一体化されたコロンブスとアメリカはなにを共有しているのか。内村はいくつか挙げて議論を進める。彼の論旨展開に従えば、両者にまず共通するのは「先進性」であり、二番目に「自由」である。コロンブスより6年後、バスコ・ダ・ガマはインドアジア航路をアフリカ喜望峰周りで開拓する。おかげで彼はコロンブス同様世界史に名を残すことになったが、内村の評価は芳しくない。バスコ・ダ・ガマの行動は「葡西 [ポルトガル・スペイン] 両国が一百年来取り来たりし方針に従いしもの」にすぎず、「古俗に従ひ時勢の潮流にうかびて進むは凡人の事業」である、と一刀両断。ガマや新世界の南北両大陸に名を残すアメリカ・ヴェスピッチと比べ、コロンブスが「絶世無比の偉人なりし所以は、<sup>きんしん</sup>斬新説を実行せんとし終に実行せしにあり」（全集1、315）ということになる。自らの信念によって実行したところが、英雄たる所以だ、というのである。

旧来の常識を打ち破った功績はさておき、冒険の結果としてコロンブスが手にした「現実」で言えば、彼はアジアに到達したわけでも、黄金の国との交易に成功したわけでもない。だが死後四百年たってみると、金の代わりにコロンブスは両アメリカ大陸のさまざまな産品を19世紀の世界にもたらしているのではないかと内村は航海家を称える。「日本国の廿倍なるブラジル国、<sup>びるきん</sup>日耳曼帝国を十五箇入るを得る合衆国、アルゼンチン共和国の無限の牧場、ポトシ [ボリビアの鉱山都市] の銀山、キャリホルニアの金鉱、アレツガニー山

脈の煤田、シューペリオル湖辺の銅山、ミネソタ、サスカチワンの麦田、オレゴン、コロンビアの森林、日本を百倍し葡萄牙を二百倍するも尚ほ足らざる樂園国はコロムブスの媒介に由て世に出でたり……大を称する勿れ 米国を見ざる人よ 富を言う勿れ 米国を知らざるものよ、十五世紀の夢想は十九世紀の終に及んで実成し始まりぬ……」（全集1、317）相変わらず威勢がいい。南北両アメリカ大陸については「一大共和国」となるろう、とは内村の予言である。

うへの引用にも見えるが、その広大さと富をめぐる内村が最大級の賛美を惜しまないのは、南北両大陸の国々のなかでも特にアメリカ合衆国である。そしてアメリカが内村にとって重要なのは広大さや富よりも、むしろ宗教的自由と政治的自由を象徴する理念としての国だからである。「米国という名は自由てう語と同意義なるに至れり、ベーコンのアトランチス [フランシス・ベーコン〈1561～1626〉のユートピア小説が描く理想国家]、トマス・ムーアのユートピア [トマスモア〈1478～1535〉の小説] は米国に於て実成せられつつあり、頑愚迷信が威力を擅（ほしいまま）にし忠実熱心は天与の自由を圧せらるゝ時、陰鬱雲深くして地上身を容るゝに処なき時、義者の信仰と仁者の喜びは常に西方新大陸にありき」（全集1、319）これ以上引用は控えるが、こののち原文ではフランスでカトリックの迫害にあったユグノーが、またイギリスのピューリタンが北アメリカに新天地を興そうとしたこと、プロテスタントばかりか、逆にカトリック教徒が主流となって植民地を發展させたメリーランドなどが挙げられている。「欧州人の理想にして最も美なるもの最も優なるものはコロムブスの発見せる大陸に於て稍や実行せられたり」（全集1、320）との結論。

### 内村のコロンブスびいき

理想化ということなら、アメリカにも増して美化されているのはコロンブスであろう。特にコロンブスの宗教心をいささか過大評価し、われわれから見ると時代がかった感さえ免れないのではないかと。たとえば、コロンブスの「宗教心」は、アメリカ発見より半世紀まえ、イスラム陣営の手に

落ちた「東羅馬 [ローマ] 帝国」に代わって新たなキリスト教国を「開発せんとするにありたり」(全集 1、320) といったあんなばいで、コロンブスはキリスト教世界の「救世主」である。

コロンブスの聖地奪還「十字軍」について、内村が本気なのが「行績」初版本文と『記念論文』との比較によってわかる。コロンブスの行動をめぐり、『記念論文』ではなまなましい記述が増えるのである。レコンキスタによってイスラム勢最後の要衝グラナダが陥落するのはコロンブスが航海に乗り出すのと同じ 1492 年である。その 3 年前、コロンブスはカスティリアが「バザー」の町を攻撃するのに同伴した。そのときトルコの使者がやってきて、グラナダをスペイン軍が奪取すれば「我領地内の基督信徒を悉く誅戮し教会及墓地を破壊せん」という趣旨のトルコ王親書をもたらし、という。この手紙の「非礼」と、加えて使者が伝えるキリスト教徒迫害の有様をコロンブスは知ってしまう、と内村は語る。「コロンブス素より熱心至愛の信徒たれば其同胞が被害の様を聞いて焉ぞ慨然たらざらんや彼が終生念頭に在りし十字軍拳起の近因は実に茲に存せしものにて彼をして『余若し発見の事業を成効せば余はその所得を以て自ら十字軍を起こさん』と云はしめし者夫れ豈偶然ならんや」(全集 2、93~4)。コロンブスが自己犠牲を厭わない熱血漢のサムライ信者に仕上がっているのに気づこう。自らの体に流れる武士の血を誇り、『余は如何にして基督信徒となりし乎』冒頭で「余の生まれたのは戦うため」(12) と高らかに宣言してはばからないほどの内村のこと、これだけコロンブスに惚れ込むのもわからないでもないが……

増田義郎著『コロンブス』(岩波新書 1979 年)によれば、第一回目の航海に出発する直前 [1492 年 8 月 2 日ということになる] カトリック両王に宛てた書簡のなかで、彼は「インディアスの宝でもって、イエルサレムの聖墓を回復しようと建言」(183) したという。また「私は両陛下に、私の今回の事業によるすべての収穫は、ヘルサレム (イエルサレム) の征服のために使われますようにと申しのべました。両陛下はこれに対してお笑いになり、嬉しいことだとのべられて、そ

れがなくても、征服はなしとげたいと願っている旨仰せられました」と航海日誌にも記されている、と増田氏は紹介する。死の一年前、1505 年 8 月に作成させた遺言にも、イエルサレム征服のために費用を出してくれるように王に請願し、さらには息子や他の相続人に「独力でイエルサレムに行くという願望を持つとすれば神はお喜びになろう」という趣旨のことが書かれている、ともいう。(184) 内村が本気で語っている「十字軍遠征」についてコロンブス自身はどうだったのだろう、それほどまでに彼の信仰心は強いものだったのだろうか。内村流「コロンブス像」を考えるのが目的ではあっても、コロンブスとはどのような人物だったのか、その「実像」に迫ろうとする努力が、やはり最小限は必要であろう。そこで以下はわたしの手近にあって簡単に入手できた数冊の書物からの情報をもとにまとめたものである。

### コロンブスの「宗教心」

コロンブスが「ふたつの G」(金と神) を求めてアジアに到達しようとした、というのはよく知られている。聖書にあっては相反するふたつの価値観はどのような背景のなかで共存できたのか。

彼が生きた時代、東方世界についてヨーロッパ人が手にできた情報は少なく、マルコポーロの『東方見聞録』は宮崎正勝氏によれば「信頼できる数少ない手引書の一だった。」(『ジバング伝説 - コロンブスを誘った黄金の島』中公新書 2000 年、19、以下『ジバング伝説]) 実際にはイスラム人の伝説にすぎなかった黄金島「ジバング」は、マルコポーロ自身の実体験部分と単なる伝聞とが混在する『東方見聞録』をとおしてイメージが肥大化してしまい、ヨーロッパ中に広まる。ラテン語訳を読んでジバングに魅了されたコロンブスは、その発見を自らの「人生を賭した事業」(『ジバング伝説』20) としてしまう。恵まれぬ青年時代をおくり、船乗りとして冒険好きで荒々しい気性の持ち主だった彼にすれば、まさしく一攫千金の夢だったのだろう。

個人の性格もさることながら、同時にコロンブスを取り巻く風土や時代がそうさせた面もあった。生まれ故郷のジェノヴァは海洋貿易都市国家

としての船乗りを輩出した。商業で生きる町として実利的風土が強く、フィレンツェやベネチアとは違って「知的生活には関心が薄かった」ようである。生活のための基本原理は「自由な事業精神」にこそある、とヴェネツィア商人は考えていた、とジョン・ダイソンは自著『コロンブス－黄金と神と栄光を求めて』（河出書房 1992年 28、以下『黄金と神と栄光』）で語る。さらに大きな歴史的背景でいえば、1) 15世紀なかば、東ローマ帝国滅亡に象徴されるイスラム「異教徒」進出にたいするキリスト教圏の反発と、2) 不安定さを増した陸路に頼る東洋貿易に代えて、西回り航路開発によって「香料と金」を手に入れたいと欲求がヨーロッパに満ちていた時代でもあった。

コロンブスがまずは熱心なカトリックだったことは違いない<sup>1)</sup>ようだが（『コロンブス－黄金と神と栄光を求めて』25、ミシェル・ルケーヌ『コロンブス 聖者か、破壊者か』創元社 1992年 21など）、現代の日本でイメージされるような静かな「クリスチャン」ではなかった。当時大西洋に乗り出すには危険がつきもので、そうしたことをするのは「向こう見ずな青二才に限られ」た、と請け合うのは『1492年 コロンブス－逆転の世界史』（青土社 2009年 222、以下『1492年』）の著者フェリペ・フェルナンデス・アルメストである。彼によればアゾレス諸島を越えると「背に風を受けて進む」ことになるのが理由だからだ、という。未知の航海に乗り出すには風に逆らって進むのが常識だった。そうしないと帰りは逆風を受けることになり、帰還航路がおぼつかなくなる危険があった。だから「常識に逆らい風を背に遠洋に出るには、冒険者はよほどの無知か無鉄砲」ということになり、コロンブスはその両方だったのである。（222）

コロンブスを航海に駆り立てた本はどのような

ものだったのか。「彼が若者として探険者の使命感が形成される時期に読み耽ったのは、十五世紀版の低俗読み物－騎士の海洋でのロマンスものや、さらに扇情的な聖者の冒険物語－だった」といい、当時の騎士道物語にかぶれて自分は先祖が高貴な貴族だった、との瞑想をも彼は好んだらしい。こうしてドンキホーテよろしく、まずは名誉と冒険を求めることが第一だったそのコロンブスが、第一回目の航海に乗り出す直前には「異教の人間との出会いとこの人々をキリスト教に改宗させることを、大西洋探険の目的の一つと唱え始め」る。（『149年』224～9）こうしたコロンブスの「にわか布教」熱について、アルメストは彼がフランシスコ会「精神派」と呼ばれる厳格な修道僧士たちの影響を受けたのであろう、と説明している。この一派は、どうやら増田氏が『コロンブス』で詳説されているフランシスコ会「スピリチュアル派」を指すようで、彼らは「徹底した貧困の生活のうちに真実の信仰を守ろうとし」（『コロンブス』176）たという。フランシスコ会修道僧グループとは別に、増田氏はこの修道会と関係が深かったイザベラ女王その人もコロンブスの布教熱に影響しただろう（『コロンブス』181）とも述べる。第一回航海に出かける直前、コロンブスが布教への情熱を燃やしていたことは間違いない。

ただし注意しておきたいのは、コロンブスにとっての布教と騎士道物語的冒険ロマンとの近さである。布教への信仰心と騎士道物語的冒険ロマンが目的とする「名誉と金」は、紙一重でコロンブスのなかにうまく収まっていることは見逃せない。しかもながらくは冒険ロマンのほうが比重が高かった、やに見える。だからコロンブスのアメリカ発見を次のように「宗教事業」なりと断言してはばからない内村の解釈には、いささかの無理があろう。

1) ラス・カサス『裁かれるコロンブス』（岩波書店 1992年）33ページのなかで、コロンブスの敬虔さについて、次のような証言がある。

「キリスト教のことに関して言うならば、もちろん彼はカトリック教徒で、しかも非常に敬虔であり、何事かをする際にも、口で言う際にも、行動を開始しようとする際にも、まず必ず前もって、「聖三位一体の御名において、こうしよう」とか「こうなるだろう」とか、あるいは、「こうなるだろうと思う」とか付け加えて言うのであった。……教会の定める断食を非常に厳格にまもり、しばしば告白を行い、聖体を拝領した。聖職者・修道士と同じように聖務日課の定時には必ず祈り、冒瀆的なことばや誓いを忌避し、聖母と、ならびに熾天使（セラフィン）の神父聖フランシスコに深く帰依した。」カトリック教会への忠誠度は高かったのである。

三、慾心上の希望に十百倍する黄金国をコロムブスは発見せり、宗教上の希望も彼の祈祷に超越して報ひられたり

茲に余輩の特別の注意を要する事はコロムブスは非常の宗教家にして米國発見は宗教事業なりし事実なり、コロムブスの為人（ひととなり）と事業とを評するに当て彼の宗教心を看過するものは此偉業の真性を解せざるものなり（全集 1、318）

内村のうへの言葉に従えば、たとえば『コロムブス 大航海時代の起業家』（中公新書 1989年、以下『起業家』）を著した青木康征氏のような立場は、コロムブスがなした「偉業の真性を解せざるもの」になるかもしれない。コロムブスを「ジェノヴァ生まれの船乗りというより、ジェノヴァに生まれ、地中海商業世界に育った事業家、つまり、地中海商業人」（『起業家』17）と解釈される青木氏は、コロムブスの航海を「個人的な冒険航海でもなければ、カトリック両王の援助をうけて行なう航海でもなく、「コロムブスが売り込んだ計画を買い取ったカトリック両王が王室の事業として仕立てた航海」である、と結論する。（『起業家』5）ジパングにたどり着くのもさることながら、コロムブスが両王との間でかわした「サンタ・フェ協定」が語るのは、コロムブスがカタイ（中国）を中心とする東方世界と新航路を開拓することによって、「新アジア交易ルート」を開設し、もって「アジアの富をヨーロッパに独占的に運び」こみ、「利益の9割を王室が、残る1割」をコロムブスが手に入れるようにすることである、というのである。だから実体はまさしく交易事業そのものであり、これこそが二人の王との協定でコロムブスが売り込んだ航海計画の目的であった。彼が「インディアス事業」と名づけたこの企画はだから、21世紀のわれわれがいう起業そのものである。もちろんキリスト教の布教効果についても書かれてはいるが、それは副次的で西方航路開拓という大前提はさておき、企画全体の性格としては、したたかな計算に基づき、コロムブスが自らの利益と航海への承認を得るために練り上げた「ビジネス企画書」そのものである、

ということになる。こうした見方に立てば、熱烈な信仰に裏打ちされて布教を志す宗教活動家でもなく、騎士道的冒険ロマンを求める無鉄砲で非常識な船乗りとも異なるイメージをそなえたコロムブス像ができあがる。互いに調和させるのが難しい側面がコロムブスには備わっており、力点をどこに置くかによって彼の姿は変化する。だからこそ「毎年のようにあらゆる角度から分析のメスを入れられ、その都度ますます正体がぼやけてしまう不思議な人物」（『コロムブス 聖者者か、破壊者か』4）という（すこし誇張された）評価が出たりする。

内村のコロムブス論に戻ろう。要するに「宗教心」をめぐる内村はコロムブスに自らの理想とする信仰を投影しているのである。これはひとつには、例の不敬事件の後遺症であろう。いちれんのコロムブス論を内村が執筆したのは、不敬事件で第一高等中学校を辞職した直後だったのである。晩年ジェノヴァの冒険家が不遇の日々を過ごしたことに内村は同情的で、そのときの内村の心情がコロムブス評には反映されている。これについてはあとで再度触れたい。

コロムブスの自己利益追求と信仰心を考えるとき、彼が生きた15世紀という時代を支配した「歴史の神学」を考えねばならない、と説いたのは増田氏である。フランスの批評家マルセル・バタイオンの考えを紹介しながら氏が説くところ、「人間の歴史〔世界史〕は天地創造から最後の審判までの間に展開され」ており、人間界の「いっさいの重要な出来事は、あらかじめ神意によって決定されていることになっていた」（『コロムブス』169～170）という。神の摂理が人間存在を支配している、とする運命決定論である。このような文化的精神風土のなかで、コロムブスの「同時代人はすべて、起業家と預言者が奇妙にまざり合った存在」で「『発見』を神の摂理のわざであると考えていた。」（『コロムブス』169）この考えをとれば、コロムブスが起業家であって、同時に熱烈な布教熱の持ち主であったことは不自然ではない、ということになる。ふたつのGが調和して仲良くコロムブスのなかに共存した、ということである。21世紀のわれわれには理解しにくいこと

ではあるが、たしかなのは内村にとっても「利益追求と信仰（布教）」というふたつの目的を調和させて説明するのは簡単ではなかったようで、コロンブスを駆り立てたのが「欲と愛」であると率直に認めたあとは、「此正反対の二者合してコロムブスとなり終に彼の偉大なる事業を生み出せり」とだけしか解説していない。もっとも「コロムブスを以て利己貪慾の冒険者と見做すものは未だ大思想は私慾の支配の下に発すべきものにあらずとの心理学上の原理を忘れたる人なり」（全集1、316）といつもの内村節は聞こえてはくるが。

### 原住民と「奴隷売買創起者」

「宗教心」もさることながら、コロムブスをめぐる内村の解説で現代とズレを感じさせるのは、原住民と彼の関係をどのようにとらえるか、という問題だろう。コロンブスが現代のわれわれに評判が悪いのは、原住民をも含めた彼の対異文化対応がひとつの原因だからである。例をひとつ。詳しくはご覧になるといいが、日本語版「ウィキペディア」には現地住民インディオにたいするスペイン人たちの残虐行為がアメリカ版よりも仔細に書き込まれている。（2013年10月4日現在）アメリカ人よりも日本人のほうが、コロンブスにたいして辛いわけである。一部を下にコピーしておいた。多くの日本人がコロンブスについてどのような知識をサイト利用で容易に得られるかを確認するためである。

二度目の航海でイスパニョーラ島に戻ったコロンブスは殺害されていた最初の植民者に代えて、あらたな植民地をつくるが、入植したスペイン人とインディオとの対立を語る部分は次のような調子である。

コロンブスの率いるスペイン軍はインディアンに対して徹底的な虐殺弾圧を行った。行く先々の島々で、コロンブスの軍隊は、海岸部で無差別殺戮を繰り返した。まるでスポーツのように、動物も鳥もインディアンも、彼らは見つけたすべてを略奪し破壊した。コロンブスがイスパニョーラ島でしばらく病に臥せると、コロンブスの軍勢は凶暴性を増し、窃盗、殺人、強

姦、放火、拷問を駆使して、インディアンたちに黄金の在処を白状させようとした。

もちろん誇張もあるだろうが、ここに語られたスペイン人たちの行動がおおむね歴史的事実であることをわれわれは知っている。1496年までにイスパニョーラ島は制圧され、やがて半世紀ほどのうちに「カリブ海のインディアンは事実上絶滅させられていた。」（トーマス・R・バージャー『コロンブスが来てから 先住民の歴史と未来』朝日選書 1992年22）

インディオたちにキリスト教受容を求めた教会は、法王名でアメリカをスペイン国王に授ける。おかげで彼らはスペイン国王の「臣民」とみなされ（増田義郎『物語ラテン・アメリカの歴史 未来の大陸』中公新書 1998年83）、鉱山や農奴といった強制労働に駆り立てられることになる。（エンコミエンダ制）服従しないとどうなったかを、スペイン人たちの蛮行を本国に訴えたことで後世に語り継がれるカトリック司祭ラス・カサスから引用しておく。「インディオの王たちと人民が課せられた義務を果たすことをやめると、キリスト教徒たちはただちに彼らを、命令にそむいて蜂起した叛徒ときめつけ、その懲罰としてすぐさま追いまわし、戦いを仕掛けたのであった。そうした戦闘の中で、信じられるような無慈悲さで多数の者が殺され、生け捕りになった者は全部彼等の奴隷にされた。」求めていた金が見つからなかったため、この奴隷たちを「主要な収入と見なし、エスパーニャ人たちがこの島に居住するために両王の費やされた支出に充当しようと考へ」たのが「提督」たるコロンブス本人だった。（『裁かれるコロンブス』237）コロンブスの死後20年を経ずして、メキシコのアステカ帝国がコルテスに滅ぼされる。インカ帝国もピサロによって同じ運命をたどり1533年には事実上壊滅。こうした災厄をコロンブスは間接的に両アメリカ大陸にもたらすきっかけとなった。だから「1492年以来、先住民の制度習慣、生活様式、そして彼らの土地は攻撃にさらされつづけている。南北アメリカの歴史は、先住民に対するヨーロッパ社会の侵犯の歴史である。」という見方もたしかにいっぽうで

は成立する。(『コロンブスが来てから』8)

西欧が「布教」の名のもとに新大陸でおこなった行動をめぐり、われわれほどには内村は醒めていない。1930(昭和5)年には世を去った彼は、西欧植民地主義の「功罪」をめぐる議論にもうとかっただろうし、まして20世紀末から今世紀にかけて支持の広まった多文化主義の価値観と親しんだわけでもない。

われわれが関心を持たざるをえない奴隷売買とコロンブスを、内村がどのように捉えたかといえば、深入りを避けて簡単に「事実」だけに触れるにとどめている。コロンブスの航海は前後4回に及んだが、初回の航海を終えてバルセローナに帰還したときにコロンブスが「9人」<sup>2)</sup>の「インディオ」を連れ帰った、と紹介し、次に1493年の第2回航海で「奴隷売買の創起者」と見なされるようになったきっかけとして、国王宛にコロンブスが送った書簡のなかで「土人移送のことを云々せし」(『記念論文』全集2、114)と言及している。そのあとコロンブスと奴隷をめぐって内村が紹介するのは、第3回航海中[を指していると読める]に提督たるコロンブスが本国に送り届けたとされる「奴隷船5艘」をまえに、イザベラ女王が「嗚呼予は予の臣民を如此売買するの権を何人にも付与せざりしに」(『記念論文』全集2、117)と嘆いて奴隷を解放し、この一件がきっかけでコロンブスが讒訴されるようになった、とする箇所である。

コロンブスによるインディオ移送について、わたしの手元にある資料のなかで青木氏が同じエピソードを扱っているが、内村のとは説明が異なるようである。インディオ奴隷化は1495年2月に五百名がセビリアに送られたのが本格的スタートで、このときカトリック両王は、いったん許可した売買を「神学者」に諮問し、その結果売買許可を取り消して「売却済み」インディオを保護したという。(『起業家』155~6)ところが同年8月末、提督はさらに五百名を女王の元に送りつける。(『黄金と神と栄光』190)驚いた彼女は内村

が紹介したのと同じように、「提督はいかなる権限をもって我が臣民をかくも粗末に扱うのか」(ママ)と怒ったが、インディオたちが反乱者であったことがわかると「全員、セビリアで競売されてしまった。」(『起業家』156)

コロンブス個人をめぐって、あるいは内村は現代のわれわれほど多くを知らなかったかも知れない。コロンブスは私生活がいつも「謎」めいたところのある人物として知られるほどだから。ただし奴隷として売買対象とされたインディオへの処遇をめぐり、内村がなにも知らなかったわけではないのは、うえからもわかる。興味深いのは、内村の反応である。コロンブスについて「奴隷売買創起者」という名称を使っているが、だからといって世界史の流れのなかでコロンブスが負うべき異文化抑圧と破壊への引き金としての役割には踏みこまない。植民地支配体制下での奴隷売買は、内村の筆を追う限り、晩年コロンブスが不遇の生活を送らざるをえなかった、彼にたいする讒訴の遠因としてしか捉えられていないのである。植民地経営に失敗して王の信任を失い、過去の忘れられた人物として晩年は人から相手にされなかったコロンブス<sup>3)</sup>に内村は同情的である。

「偉人当世に疑はれ義者無辜の鎖に繋がる古今其例少からず、効あれば之を妬み名成らんとせば之を妨ぐ、人情の弱き吾人は其例に遇う毎に未だ曾て歎ぜずんばあらざるなり 今や発見の王なるコロムブス亦此情網に漏る、能はず 暗黒の時代は彼が眼前に開かれんとせり」(『記念論文』全集2、118)

うえの部分も初版本文には見当たらず、単行本『記念論文』で加筆されたものである。さきに触れたとおり、不敬事件によって内村自身も『記念論文』を刊行したわずか2年前の1891(明治24)年には職を失っていた。だからコロンブスの苦境に自らの姿を重ね合わせたとしても不自然ではない。キリスト教布教のために呻吟した殉教者的精

2) 「6人」という数字をあげる資料のほうが多いようである。

3) コロンブスが「総督」の地位を追われたのは、1500年8月のことという。(『ジパング伝説』184)

神にも似た自己犠牲の美を、コロンブスと自分自身のなかに共通項として見いだしたのである。同時期執筆になる『基督信徒のなぐさめ』（1893〔明治26〕年）のなかで、自らの失敗に触れた内村は、神のために興した事業に奮闘した者を無情にも待ち受ける悲運を「正義公道の無功力なるを知れり」（全集2、61）と嘆息していることも興味深い。

### 理念先行と「現実」

内村が語るコロンブス像を現代の読者として考えてみた。では理想化されたアメリカは、この時期執筆された代表作『余は如何にして基督信徒となりし乎』ではどのような扱いを受けることになったのか。1884年内村はあこがれのキリスト教国アメリカに到着した<sup>4)</sup>。そこに彼は「聖地」としてのアメリカを発見するはずだった。1877（明治10）年から81（明治14）年までを札幌農学校で過ごした内村は、現代の教育体制では考えにくいような教師と学生の濃厚な関係を経験する。17歳から21歳まで多感な青年時代に英語による教育を、主にニューイングランドからやってきた多くのアメリカ人によって施され、あまつさえ洗礼を受けてキリスト教を受け入れた内村にとって、アメリカとは「教会堂のある丘、聖歌と賛美をもって響き渡る岩山」を夢みさせる別天地であるはずだった。太田氏が指摘するように12歳のときから「専ら西洋的な教育」（『内村鑑三』16）のなかで育ってきた内村は、彼自身が告白するように「基督教国と英語国民とを特別の尊敬をもって眺めていた」（『余は如何にして』109）。

キリスト教の理想を体現する人たちに、たしかに内村は出会った。もともと彼の渡米は前向きな理由によるとは言いにくく、最初の妻タケが新婚まなしに「フリン」してしまい、ショックを受けた真面目な内村は傷心を癒やすために「旅費の工面もままならないまま」飛び出すように日本を離れた（小原信『内村鑑三の生涯 日本のキリスト教の創造』PHP文庫1997年158）ともいう。こうした個人的理由が影を落とすなかで始まったア

メリカ生活だったから、信仰面でも悩みは深かっただろう。そうした内村を「回心」へと導くことになったアマスト大学総長シーラーとの出会いはつとに有名である。また渡米した翌年（1885年）、ペンシルバニア州エルウィンにあった精神薄弱児施設で半年ほど働いた内村に、院長カーリンはあれこれと親切だった。（『内村鑑三の生涯』168）数は少なかつたかもしれないけれど、善きサマリア人とのこうした出会いは、あとで触れるようにキリスト教国に彼がいだく最終的な信頼感醸成に貢献しただろう。しかし、彼らは少数だった。

実際にアメリカで彼を待ち受けていたのは公德心の欠如であり、拝金主義と人種差別だった。渡米直後、友人のひとりスリに財布を盗まれ、車で「親切」にも一行の旅行カバンを担いでくれたメソジスト教会の執事はチップを（アメリカでは当然だが）要求し、大切にしていた絹のコウモリ傘を内村自身も盗まれる。ひとびとはカギの束を持ち歩き、まるで「人を見たら泥棒と思え」という諺を地で行くありさま。アメリカ人とみれば信仰を分かちあう「教役者」だと思入れ、美しい幻想に浸っていた内村は「きわめて徐々として」ではあったが、「この子供らしい想念を捨てた」（『余は如何にして』111）。

東洋人内村鑑三をもっとも憤らせたのは中国人への差別だった。『余は如何にして基督信徒となりし乎』のなかでも、具体例がいちばん豊富に紹介されていることでもわかる。黒人とインディアン蔑視についても語られてはいるが、中国人差別については、彼らがなぜそれほど白人アメリカ人から嫌われるのか、アメリカ人が嫌う理由を3つまでも詳述している。いわく1)貯蓄を中国本国に持ち帰り、2)自国の風俗に固執するあまり同化せず、3)低賃金で働くのでアメリカ人労働者に損害を与える、と。内村のなかでは中国人への同情はこうして強かったが、彼自身も教会にゆけば、伝道事業成功の「見世物」として人々の前に引き出されるというピエロ的生活までオマケがついており、憧れていた夢のキリスト教国アメリカ

4) 内村は1884年（明治17年）に24歳でアメリカに渡り帰国は4年後だった。

の現実、まずは幻滅しか彼にもたらさなかった。内村の慨嘆である。

基督教国の他の非基督教的特徴について語るには余に時が足りない。子供の理解にさえ明かな単純な道徳をまったく無視してその強固さでは数百万の金と銀に依存することのできる合法化された富籤、闘鶏とみくじと競馬と蹴球試合の場面で目撃されるような広汎な賭博的傾向、スペインの闘牛よりもっと非人間的な拳闘、自由な共和国の人民によりもホッテントット人によりふさわしい私刑リンチ、規模の大きいことは全世界の貿易に比を見ないラム酒取引、政治における扇動運動、宗教における教派的嫉妬、資本家の圧制と労働者の傲慢、百万長者の愚行、夫の妻に対する偽善的愛情、等々、等々は、如何？これが我々が宣教師によって基督教の他宗教に対する優越性の証拠として受け取るように教えられた文明であるか。ヨーロッパとアメリカをつくった宗教はたしかに至高処いとたかきところからの宗教であったに相違ないということを、何たる恥かし気

な様子で彼らは我々に公言したことか。もしも今日のいわゆる基督教国をつくったものが基督教ならば、天の永遠のろの詛いをしてその上にとどまらしめよ！平和は我々が基督教国にて見出し得る最後のものである。混乱である、複雑である、精神病院である、刑務所である、救貧院である！（『余は如何にして』123）

口を極めて罵るとは、このことであろう。理念的ヴィジョンと現実が食い違ったのはコロンブスばかりではなく、アメリカもそうだったのである。だが、こうした経験を実際にくぐり抜けて10年近く経ってからも、コロンブス論で内村が「アメリカ賛美」を繰り返すことになったのは見てきたとおりである。なぜアメリカをそれほど称えるのか。実は『余は如何にして基督信徒となりし乎』と同時期に執筆された『地理学考』（1897年の再版では『地人論』と改題）でもアメリカ賛美は語られる、しかも明快に「攝理」としてのアメリカが語られているのである。

（第一部おしまい）